

令和7年度普及活動の実績

東葛飾の農業 「農業者が自信と誇りを持って 続けられる都市農業の確立」



千葉県東葛飾農業事務所
東葛飾農林業振興普及協議会

ねぎ産地活性化に向けて！

東葛飾地域のねぎ産地の活性化に向け、令和4年度から7年度まで、地域の若手ねぎ農家を対象に、ねぎ研修会を開催しました。

令和7年度第1回目の研修では、秋冬ねぎ栽培が盛んな松戸市矢切地区で、夏越し対策の現地研修を行いました。

「カイラン」で直売所を盛り上げよう！

「あびこ農産物直売所あびこん」では、夏季の野菜の売上向上を目指し、県女性農業者リーダー講座に参加した3名をリーダーに、「カイラン」栽培に取り組みました。

市内で開催した現地検討会では、雨にもかかわらず活発に学習を行いました。

次代の農業を支える担い手を育成

農業経営体育成セミナーでは、指導農業士との意見交換会を通して、農業経営に必要な知識や技術、経営戦略等、地域の篤農家の経営の考え方を学びました。

温水点滴処理機実習を実施

なしの白紋羽病に対し有効な防除方法である温水点滴処理の外部労力への委託を目指し、援農ボランティア養成講座で実習を行いました。

はじめに

東葛飾地域は、県内で最も都市化が進んでいる地域でありながら、ねぎ、こかぶ、にんじん、えだまめ、日本なし等の園芸品目を中心とした農業生産が盛んに行われており、首都圏の新鮮な食料供給基地として重要な役割を担っています。

しかし、近年、高齢化による生産者数の減少や都市化に伴う農地面積の縮小、資材費の高騰等、農業を取り巻く環境は厳しくなっております。特に異常気象による猛暑の影響は大きく、品種や品目転換を含めた生産方法の見直しに迫られています。

この厳しい状況に負けず、今後も地域農業の維持・発展を図るためには、収益力の高い経営をする農業者を育成すると共に、農業後継者、女性農業者、新規参入者など多様な担い手の確保・育成が急務となっております。

このような中、当農業事務所では、「第6次東葛飾地域農林業振興方針（令和4年度～令和7年度）」に基づき、県内随一の都市近郊農業地帯の維持・発展を目的に、多様な担い手による地域と共生した都市農林業を実現するための各種施策を展開してまいりました。今後も、県農業部門の総合的な行政機関として、農業者の皆様方の期待にお応えする所存です。

本書では、令和7年度の普及活動成果及び普及活動報告として7事例の実績をとりまとめました。今後、それぞれの成果を踏まえ、普及活動のより一層の充実を図っていきます。

最後に、これらの普及活動を展開するにあたり、御協力、御支援をいただきました市や農協等、関係機関各位及び農業者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和8年3月
千葉県東葛飾農業事務所
所 長 三 森 豊

目 次

《 普及活動成果 》

- 1 東葛飾地域のねぎ産地活性化に向けて！…………… 2
ー課内一丸となって取組む次代の担い手育成ー
(令和7年度千葉県農業改良普及事業協議会褒賞事業 発表資料)

《 普及活動報告 》

- 2 多様な販売方法を学び、経営につなげる！…………… 6
ー農業経営体育成セミナーの取組ー
- 3 暑さに負けないこまつな・えだまめ生産に向けて…………… 8
ー生産者と農作物の暑さ対策を実施しましたー
- 4 ねぎ栽培の課題解決を目指して……………10
ー夏季の気象変動に対応したねぎ作りー
- 5 水稻における高温対策技術の検証……………12
ー白未熟粒の発生軽減に向けてー
- 6 「#プロジェクトK (けい)」で直売所を盛り上げよう！……………14
ー「あびこん」で頑張る女性農業者の活躍ー
- 7 なし生産における農家の労力負担軽減に向けて……………16
ーボランティアや地域の法人与自然と連携してー

普及活動成果

東葛飾地域のねぎ産地活性化に向けて！

—課内一丸となって取組む次代の担い手育成—

活動事例の要旨

東葛飾地域の主要品目であるねぎの生産振興に向け、令和4年度から若手生産者を対象とした広域研修と、地域単位での支援を組み合わせた活動に取り組んだ。その結果、ねぎ栽培面積が60a以上の経営体が24戸から41戸に増加するとともに、広域研修の研修生同士のネットワークの構築、出荷組合活動の活性化、地域別の研修会の開催など動きが生まれ、ねぎ産地の担い手育成による産地の活性化につなげることができた。

1 活動のねらい・目標

ねぎは東葛飾地域の露地野菜経営において基幹的品目であり、管内全域で生産されている。産出額も約31億円と県の22.5%（令和3年）を占めており、千葉県内でも主要な産地となっている。

ねぎは機械化体系が確立され、市況が比較的安定しているため、既存農家の規模拡大や、新規参入者が新たに取り組む品目として栽培者が増加傾向にある。一方で、販路の多様化などにより、共販割合が減少しており、その結果、ねぎ栽培の経験が浅い生産者は、集団学習によって栽培管理技術を培う機会が減り、生産量や売上が伸び悩むケースもみられた。

そこで第6次農林業振興方針(令和4年～令和7年)では、「ねぎの規模拡大によるねぎを基幹とした経営体の育成」を課の重点課題とし、管内全域を対象にねぎ産地の振興に取り組んだ。成果目標については、ねぎ生産面積60a以上の経営体を24戸(令和3年度)から38戸(令和7年度)とすることを目標とした。

2 活動の内容

管内全域を対象とするに当たり、生産者、特に若手や新規参入者が全域に点在していること、JAの出荷組織がある地域があることなどを鑑み、全域の若手を対象とした集合研修と、各地域の状況を踏まえた課のグループごとの活動を組み合わせた活動によりねぎ産地の振興に取り組んだ。

(1) 広域活動：青年農業者等スキルアップ研修、広域ねぎ研修の実施

管内全域のねぎの新規参入者、若手農業者を対象に、県の事業を活用した青年農業者等スキルアップ研修を開催した。この研修は令和5年度まで継続し、令和6～7年度も、広域ねぎ研修会として実施した。研修は年2～3回実施し、内容は主要種苗会社からの品種と管理の講義、病虫害防除、土づくりや排水対策、先輩農業者への視察など、研修生の要望に沿いながら、基本的な技術が習得できる内容とした。

令和6年度には埼玉県深谷市の生産法人を訪問し、大規模なねぎ経営を学習した。

また、研修生の交流を促すため、小グループに分けた意見交換会も適宜実施した。

(2) 地域ごとの活動：地域の状況を踏まえた活動

ア 北部グループ（野田市、柏市、我孫子市）

(ア) J Aちば東葛ふたば青果物出荷連合会ねぎ部会の活動支援

管内で唯一共選にて市場出荷をしている組織である（部会員43名）が、コロナ禍で活動が停滞していた。そこで、新品種や資材展示ほの設置、講習会や現地検討会の開催を、全農千葉県本部とも連携して支援した。

(イ) 個別経営体支援

野田市では栽培面積が1haを越える大規模の栽培者から、新規にねぎを始めた小規模の栽培者が点在しており、個別対応を主として支援した。

また、新規ねぎ生産者を対象に、令和4年からねぎの栽培技術と合わせてGAP手法の習得に向けた研修会を年1～2回開催した。

イ 中部グループ（松戸市、鎌ヶ谷市、流山市）

都市化が進み、生産拡大は厳しい状況にある地域であるが、特に経営規模拡大を志向する経営体を抽出し、重点的な支援を行った。

- ・後継者のいる経営体などへの専門家派遣による経営改善支援
- ・農福連携や短期派遣（1日農業バイト）の活用による労働力補完の支援
- ・中核的経営体への経営意向調査の実施

ウ 南部グループ（市川市、船橋市）

土壌病害により生産が不安定となる春夏ににんじんに代わる品目としてねぎに着目し、にんじんととの輪作体系、病害リスク、経営面での有利性について検証した。また、出荷組合がほとんど存在せず情報交換の機会が乏しい上、知識や技術にも差が見られることから、船橋市内の生産者を対象に「船橋ねぎ研修会」を開催した。

(3) 課内の活動体制と活動の工夫

ア スキルアップ研修（広域ねぎ研修）

所内の野菜担当で構成する野菜班会議において、ねぎの新規参入者、若手農業者をリスト化し、各経営体が抱える課題を持ち寄り、研修のテーマや開催時期を検討した。また、研修結果アンケートにより研修生の要望を把握し、カリキュラムに生かした。

イ 地域ごとの活動と課内連携

「ネギ栽培マニュアル東葛飾地域版」や地域のねぎ篤農家の経営内容や栽培技術を簡潔にまとめた「東葛飾地域のねぎモデル経営」を課内共有資料として継続的に活用した。

また、顕在化した夏越し対策について、令和6年度に共通対策資料として「秋冬ねぎの夏越し対策」を作成し指導方針を共有した。指導方針が共有化されたことで、夏越し対策向けの新品種の展示ほ設置や、夏期の難防除害虫であるシ



写真1 スキルアップ研修
(R5.10.23)
(土寄せを篤農家から学ぶ！)

ロイチモジヨトウの交信攪乱剤を用いた防除試験が各グループ管内で同時に実施し結果を共有することができた。

3 活動の成果

(1) ねぎを基幹とした経営体の育成

広域活動と地域ごとの活動を組み合わせて、ねぎ産地の担い手育成を図った結果、ねぎ栽培面積 60a 以上の経営体は 24 戸から 41 戸に増加した(図 1)。

	ねぎ生産面積60a以上の経営体					(戸)
	R3年度	R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	目標
北部グループ	11	14	11	14	14	17
中部グループ	12	12	14	16	17	17
南部グループ	1	2	4	6	10	4
	24	28	29	36	41	38

図 1 ねぎ生産面積 60a 以上の経営体

(2) 活動により得られた対象農家や地域の変化

- ・広域研修(スキルアップ研修、広域ねぎ研修会)は栽培技術の向上だけでなく、若手ねぎ生産者の交流の場となり、地域を越えたネットワークが形成された(管内全域)。
- ・J A ちば東葛ふたば青果物出荷連合会ねぎ部会は、部会による展示ほの設置や研修会の開催など活動が活性化した。部会活動の活性化は、ねぎの新規格ダンボールへのスムーズな変更や、使用資材の絞り込みによるコストダウンの取り組みに繋がった(柏市、我孫子市)。
- ・中核経営体のモデル改善事例を作成し、個別課題の改善を促したところ、各経営体の規模に応じた経営強化が図られた(松戸市、鎌ヶ谷市、流山市)。
- ・「船橋ねぎ研修会」は点在するねぎ農家の学習機会の創出、春夏にんじんからの品目転換農家の技術習得など、地域のニーズにマッチしたことから、定期的に開催されるようになった(船橋市)。

4 将来の方向と課題

ねぎを基幹とした経営体の支援を引き続き実施(第 7 次農林業振興方針)

★今後取り組むべき具体的課題★

【技術】周年出荷体系に向けた技術対策

- ・夏越し対策の実施による秋冬ねぎの安定生産支援
- ・優良品種の導入による春ねぎの生産強化
- ・補完作物の導入支援

【経営】規模拡大と安定経営に向けた経営支援

- ・雇用を含めた労働力の確保支援、省力機械の導入支援
- ・経営管理能力の向上
- ・安定的、継続的な販売に向けた支援

普及活動報告

多様な販売方法を学び、経営につなげる！

－農業経営体育成セミナーの取組－

1 活動のねらいと背景

当農業事務所では、新規就農者を対象に、農業経営に必要な知識・技術の習得や、経営者としての資質・能力の向上を図るため、3年課程の農業経営体育成セミナー（以下、セミナー）を開講しています。東葛飾地域では、消費地に近い立地を生かし、市場出荷ではなく、直売やスーパーなどのインショップに取り組む新規就農者も多数います。セミナー受講生にとって、生産技術の習得に加え、「どのように販売するか」といった戦略を学ぶことは、経営の安定につながります。そこで、販売方法を学ぶ機会を設け、自らの経営に合った販売戦略を考えるきっかけとなる研修を実施しました。

2 普及活動の経過、結果

(1) 普及活動の経過

ア セミナーの運営体制と研修内容の検討

セミナーは、基本・専門・総合の3年間の課程で実施しており、総括担当1名と各課程担当2名を配置し運営しています。効果的な開催を図るため、毎月セミナー担当者会議を開催し、受講生の仕事や出席状況、研修内容への要望、参加しやすい曜日・時期、各学年の雰囲気、過去の視察先や効果的だった取り組みなどを共有し、研修内容や進め方を検討しました。その中で販売方法を様々な角度から学ぶ機会を設けるとともに、講義に加えて要望が多く、好評であった視察やワークショップを取り入れ、新たな気付きの創出や受講生同士の交流促進も図りました。

以下に具体的な研修例を記載します。

イ 農産物加工と付加価値の高め方について（令和7年11月5日、専門研修）

専門研修では、販売戦略の基本について講義をした後に、ワークショップとして「1本1Lの水を1,000円で販売する方法」を出席者で考えてもらいました。その後、付加価値を高める実例として、鎌ヶ谷市の「濱農カフェ」を訪問し、加工・販売について具体例を学びました。

ウ 販売戦略・情報発信について（令和7年11月27日、総合研修）

総合研修では、受講生が互いの経営を学ぶ相互訪問を実施し、自動販売機の導入により作業効率が改善されたことや販路が広がった話を聞きました。その後、農業に精通したフードコーディネーターを招いて、販路の違いや販売戦略について講義を実施しました。最後にワークショップとして、自身の経営における今後の販売戦略について各自考えた後に、参加者間で共有・意見交換をしました。



写真1 野菜の自動販売機を視察

エ 指導農業士との意見交換会（令和7年7月8日、合同研修）

全セミナー生を対象とした合同研修では、東葛飾地区指導農業士会の協力の下、経営視察と意見交換会を実施しました。経営視察では、2名の指導農業士会員宅を訪問し、出荷先や労働力、加工、情報発信などについて、ほ場の様子を確認しながら説明を受けました。その後、別会場で行った意見交換会では、セミナー生から指導農業士に栽培技術や販売先、農地の取得など、多岐にわたる項目で質問や相談があり、地域や世代を超えたコミュニケーションが図られました。



写真2 指導農業士のほ場を訪問

オ 東京都中央卸売市場大田市場視察研修（令和7年10月16日、合同研修）



写真3 大田市場の場内見学

市場流通の仕組みや産地リレーにおける本県農産物の立ち位置、市場で評価される農産物について学ぶために、青果物流通の一大拠点である東京都中央卸売市場大田市場を訪問し、セリや場内を見学しました。その後、市場の関係者から講義があり、売り場確保のために出荷に係る事前情報が重要なことや消費者のニーズの変化に合わせて、生産者も卸売業者も需要を考えた売り方が必要となるなどの話があり、何をいつどこに出荷するのかを考えるきっかけとなっていました。

（2）普及活動の結果

相互訪問やワークショップでは、セミナー生同士のつながりが深まり、「これまで自分にはなかった考え方を聞くことができ、大変参考になった」などの感想が寄せられました。また、指導農業士との意見交換を通じて、地域の篤農家との交流が図られるとともに、「時勢に応じた販売方法の工夫が必要だと感じた」、「販路確保には人脈が重要であると実感した」などの声があり、東葛飾地域における篤農家の経営の一端を学ぶ機会となりました。さらに、市場の視察では、「数日置かれることもあるので、思ったよりも熟していないものを出荷した方がよいと思った」、「生産・販売だけではなく、流通を含めた経済への理解が必要」といった意見も聞かれ、セミナー生の経営改善や意欲の向上につながりました。

3 今後の展開

地域の担い手確保は重要な課題であることから、新規就農者の技術習得と仲間づくりの機会としてセミナー活動を今後も各関係機関と連携しながら継続し、若手農業者の育成を図っていきます。

4 担当グループ 全グループ

5 協力機関

各農業協同組合、各市

暑さに負けないこまつな・えだまめ生産に向けて

一生産者と農作物の暑さ対策を実施しましたー

1 活動のねらいと背景

船橋市は露地野菜を中心とした古くからの野菜産地であり、市場や消費地が近いという立地を活かした都市農業が営まれています。特に、こまつな、えだまめは市のブランド野菜となっていますが、こまつなは、高温によりハウス内の温度が上昇し生産者の熱中症のリスクが高まるとともに、作業できる時間が短くなるなどの要因で、夏季の出荷量が減少しています。えだまめは、開花から莢の形成・肥大が進む時期に高温や乾燥ストレスを受けると、着莢が安定せず、さらに子実肥大も十分に進まないため、莢数の減少や粒張りの低下が起こり、収量や品質に大きな影響が及びます。

そこで、こまつなにおいては、猛暑下における農作業の負担軽減を目指し、生産者3名を対象にミストファンを活用した暑熱対策を実施しました。えだまめにおいては、開花時期に係る外的要因によるストレスを緩和し、えだまめの安定生産に繋げることを目的として着莢促進資材を活用した栽培試験を2名の生産者で実施しました。

2 普及活動の経過、結果

(1) 普及活動の経過

ア こまつな生産者の暑熱対策

今回試供したミスト発生器は、既存の扇風機に簡単に取り付け可能なタイプで、専用の扇風機を購入する必要がありません。また、電源があればペットボトルやタンクに入れた水を自動で吸い上げてミストを噴霧できる手軽な装置となっています（写真1）。

猛暑が続く8～9月にかけて、収穫・調製作業を行う際にハウス内で使用してもらい、ハウス内気温・湿度、葉面温度、体表温度、生産者の体感、生産物への影響の有無（徒長、病気）について調査しました。

イ えだまめにおける着莢促進資材の活用

今回試供した資材は、昨今注目を浴びているバイオスティミュラント資材に分類されるものです。花芽形成期～開花初期（写真2）に1回葉面散布することで、花芽の形成や子房肥大の促進などの収量性向上につながる効果が期待されます。

本試験では、高温・少雨などの外部ストレスを受ける8月上旬収穫のえだまめにおいて資材の効果を検証しました。収量、主茎長の比較に加えて、露地栽培とハウス栽培で効果に違いが出るかも併せて検証しました。



写真1 ミスト発生装置を取り付けた扇風機



写真2 えだまめ開花初期

(2) 普及活動の結果

ア こまつな生産者の暑熱対策

ハウス内気温は、ミストの当たる場所の温度は当たらない場所に比べて約1～2℃低く、生産者の体表温度では、ミストに当たる場所は約3℃も低くなっていました。こまつなもミストに当たって多少濡れてしまうものの、徒長や病害の発生などといった悪い影響は見られませんでした。実際に使用した生産者からは、まずまずの評判で、「猛暑時は蒸れる感じがするが、ミストがあるのとないのでは違う」「暑さに慣れていないパートさんが喜んでくれる」といった声が聞かれました。



写真3 ミストファンに当たりながら作業する様子

9月には共販組合を対象に現地検討会を開催し、どの程度の改善効果があるのかを実際に生産者に体験してもらいました。実演会終了後には、組合員同士で熱中症対策グッズについて意見交換が行われ、夏季の高温下における作業環境の改善について意識向上が図れました。

イ えだまめにおける着実促進資材の検証

今回の試験では、10株当たりの莢数、莢重及び主茎長を調査しました。莢数、莢重ともに試験区の方が慣行区と比べて1.4～1.6倍多いという結果が得られました(図1)。

主茎長は、試験区の方が短く、徒長せずコンパクトな株になりました(写真4、5)。これにより倒伏リスクが低減でき、収穫時の作業性改善が期待できます。

10株当たりの袋数は、ハウス栽培においては慣行区で1.4袋だったのに対し、試験区では2.3袋となり、供試資材の活用が収量の向上に寄与することが示されました。

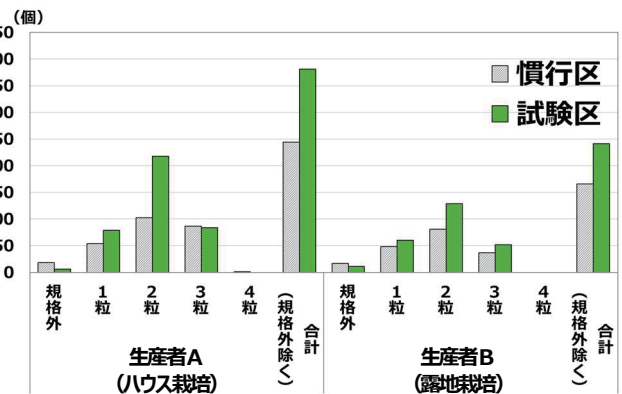


図1 10株当たりの着実数

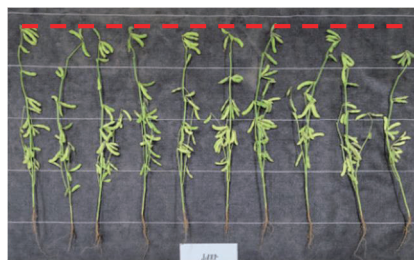


写真4 慣行区 (ハウス栽培)

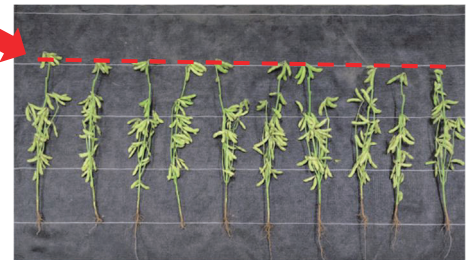


写真5 試験区 (ハウス栽培)

3 今後の展開

夏季の高温が生産者及び農作物に与える影響は年々深刻化しており、今後も継続的な対策が求められます。関係機関と連携しながら、現地で活用できる新たな技術について情報発信を行い、より効率的で安定的な生産ができるよう支援をしていきます。

4 担当グループ

南部グループ

5 協力機関

ちば東葛農業協同組合、船橋市

ねぎ栽培の課題解決を目指して

－夏季の気象変動に対応したねぎ作り－

1 活動のねらいと背景

松戸市、流山市、鎌ケ谷市は、ねぎをはじめ、わけねぎやえだまめなど露地野菜の伝統的な産地として、市場から高く評価されており、安定した価格で取引されています。

近年、夏季における高温、乾燥及び局地的な豪雨など極端な気象条件が頻発していることから、ねぎについては病虫害（軟腐病・白絹病・シロイチモジヨトウ）の発生や湿害による生育不良が慢性化しており、収量や品質に大きな影響を及ぼしています。

そこで、当地域の露地野菜産地の維持並びに発展を目的とし、夏季の気象変動に対応したねぎ生産の技術向上に取り組みました。

2 普及活動の経過、結果

（1）普及活動の経過

ア リビングマルチの検討

リビングマルチは、高温に適応した植物が地表面を広く覆うことで太陽光の地表への到達を遮り、土壌温度の極端な上昇を防ぐ効果が期待されます（写真1）。

また、土壌水分の蒸発を抑えるため、地温や湿度が安定し、土壌中の微生物にとっても活動しやすい環境を作ります。

令和7年は、2種類のオオムギを試験的に施用しました。また、当地域では台風の際に土寄せをする栽培技術が慣行となっているため、現地での波及性も考慮し、畝の片側にのみオオムギを播く方法にしました。

さらに、リビングマルチの生育状況について、若手生産者の栽培技術向上及び情報交換を促すことを目的として開催している「広域ねぎ研修会」（写真2）の場で、9月9日に現地見学を実施しました。

イ シロイチモジヨトウ対策の検討

シロイチモジヨトウは、ねぎの重要害虫の1つで、幼虫がねぎの葉身内に食い込んで食害する、防除が難しい害虫です。令和7年、千葉県では2回（8月・9月）注意報が発出されるほど各地で問題になりました。

昨年、実施した試験においては、ねぎのシロイチモジヨトウに対して高い防除効果が確認できたトルネードエースDFについて、現地の普及を図るため、複数戸のねぎ生産者にトルネードエースDFを使用していただき、効果に関するアンケート調査を実施しました。

また、殺虫剤以外の防除技術として、交信攪乱剤ヨトウコンSによる交信攪乱効果や被害抑制効果について検証を行いました。



写真1 リビングマルチの様子

(2) 普及活動の結果

ア リビングマルチの検討に係る若手生産者の情報共有

「広域ねぎ研修会」で、現地見学をしたことにより、リビングマルチを暑熱対策の一手法としてとらえる考えが若手生産者間で共有され、検討するきっかけを作ることができました。なお、今後収穫物の調査を実施し、試験結果について取りまとめる予定です。

また、ウヅキコモリグモ、ハネカクシ類、ゴミムシ類、ムカデ類などの土着天敵の増加が確認され、複合的な効果についても検討する一助となりました。

令和8年度についても、リビングマルチ以外の地温抑制手法を含め、検証を継続します。

イ シロイチモジヨトウ対策を通した関係機関との連携

トルネードエース DF の効果に対するアンケート調査については、使用した生産者からはおおむね高い効果が確認された回答が得られ、結果については、市、JAなど関係機関に情報提供し、情報を共有しました。松戸市では「松戸市農業振興事業補助金（病虫害等防除対策事業補助金）」により農業振興を図っており、対象となる防除薬剤に対し助成を行っています。今回、トルネードエース DF について、配布生産者からのアンケート結果を関係機関で共有したことで、本事業の対象薬剤となりました。今後もこのように、関係機関相互で役割分担し、課題を情報共有することで、現地の課題解決に取り組んでいきます。

交信攪乱剤ヨトウコンSについては、雌が放出する性フェロモンを人工フェロモンで混乱させる交信攪乱効果は見られたものの、慣行薬剤散布の回数を減らす結果には至りませんでした。また、ヨトウコンSを設置する費用や労力も課題となり、今回の試験では現地普及という方向性にはなりませんでした。今後も波及性を含め対策を検討していきます。



写真2 若手生産者による研修会の様子

3 今後の展開

ここ数年の夏季の猛暑により、秋冬ねぎの安定生産が困難となっています。また猛暑に加え、暖冬の影響もあり、病虫害被害や雑草対策などは、従来の栽培管理方法では対応が難しくなっています。試行錯誤しながら夏の猛暑を乗り切り、面積維持、拡大を志向する生産者もいるため、現地試験を継続し、関係機関との情報共有を行うことで、今後の気候変動対策を検討いたします。

併せて、松戸市では、ねぎを栽培する中核的生産者が主体となったSNS ネットワークが構築されています。それらのネットワークを、地域農業をけん引していく中核的生産者及び若手生産者の育成と交流の場として継続、発展することにより、現地の課題解決を図っていきます。

4 担当グループ

中部グループ

5 協力機関

とうかつ中央農業協同組合、松戸市

水稻における高温対策技術の検証

－白未熟粒の発生軽減に向けて－

1 活動のねらいと背景

近年の「地球温暖化」の影響により、水稻では白未熟粒などの発生が増加しており、それらに起因する米の品質の低下が問題となっています。東葛飾地域では、需要のあるコシヒカリの栽培に取り組む生産者が多く見られますが、コシヒカリは白未熟粒が発生しやすい品種の一つです。そこで、当農業事務所では、従来の高温対策の普及を図るとともに、コシヒカリにおける高温対策技術として、植え付け時期の前倒し（早植え）の効果と、ケイ酸資材の施用効果を検討するため、生育と品質の調査を実施しました。これらの結果を地域に情報発信することで、東葛飾地域の水稲の品質・収量の向上を目指しました。

2 普及活動の経過、結果

（1）普及活動の経過 －水稻における高温対策技術の検討及び普及－

ア 植え付け時期の前倒し（早植え）の効果検証

植え付け時期を前倒すことにより、夏場の高温を回避し、収量及び品質の向上に繋がれるのではないかと考え、コシヒカリを作付けるほ場の中で、植え付け時期の早いほ場（早植え区）と遅いほ場（遅植え区）を選定し、生育及び品質の調査を実施しました。早植え区は4月中旬、遅植え区は5月中旬の植え付けとしました。



写真1 早植え区 成熟期の様子

調査の結果、令和7年の気候においては、早植え区は遅植え区の収量、品質に勝ることはありませんでした。今年は東葛飾地域において、6月20日には水稻へ影響が生じる気温の基準となる平均気温27℃を超え、収穫までは下がることなく推移しました。早植え区も生育中の高温を避けられず、遅植え区と変わらず高温の影響を受ける結果となり、植え付け時期の前倒しによる高温の回避、品質の向上という効果が得られなかったことが考えられます。しかし、早植え区においてもコシヒカリの目標収量と同等の結果となったことから、令和7年の気候においては、5月中旬までに田植えを実施することで、収量・品質に大きな差が生じることなく水稻を栽培できることがわかりました。

イ ケイ酸資材の効果検証

ケイ酸施用は、水稻において光合成能力や根の活性の向上などに効果があり、登熟歩合の向上が期待されます。そこで、ケイ酸施用による白未熟粒の発生軽減効果について検証しました。

令和7年は、初期生育から慣行区が試験区を上回り、収穫まで生育差は変わらず、収量は慣



写真2 ケイ酸施用 出穂10日後の様子
(左：試験区、右：慣行区)

行区が試験区を上回りました。試験区は穂数が生育目標値を大きく下回ったことから、収量が伸び悩んだと考えられます。品質については、試験区と慣行区の未熟粒発生に大きな差は見られませんでした。登熟歩合については、試験区において慣行区をおよそ8%上回る結果となりました。

ウ 令和7年度水稻経営研修会の開催

「米をめぐる情勢」をテーマとした令和7年度経営研修会を2月10日にJAちば東葛東部支店で開催しました。研修会では、JAちば東葛東部地区経済センターから令和7年度の東葛飾地域における水稻の作柄・品質について、続いて当農業事務所から令和7年度実施した高温対策技術の検証結果について情報提供を行いました。そして宇都宮大学農業経済学科の小川真如助教からの米をめぐる情勢についての講演の後、生産者との意見交換会を実施し、今後の水稻経営について討論を行いました。

(2) 普及活動の結果

令和7年の夏季も引き続き高温となり、東葛飾地域でも依然として白未熟粒や茶米などによる格落ちが多く見られています。今年度実施した高温対策技術の検証結果からは、品質・収量の向上（一等米比率の向上）への効果は明らかになりませんでした。しかし、植え付け時期と収量・品質の関係についての知見や、ケイ酸資材の施用による登熟歩合の向上の可能性を確認でき、生産者へ情報提供を行うことができました。

3 今後の展開

植え付け時期の前倒し（早植え）の効果検証において、今年度の気象条件下では5月中旬までの植え付けであれば、収量と品質を確保できました。来年度も引き続き、植え付け時期と、収量及び品質の関係性について調査を行います。

また、ケイ酸施用の効果検証について、令和7年の試験においては慣行区と試験区の地力に差があった可能性が考えられます。そこで、土壌分析を詳しく実施し、ほ場条件をそろえた上で、慣行区と試験区を新たに設置し検証を行います。

これらの効果検証を重ね、今後も続いていくであろう高温下において、更なる米の品質・収量の向上を目指します。

4 担当グループ

北部グループ

5 協力機関

市川市農業協同組合、ちば東葛農業協同組合、各市、全国農業協同組合連合会千葉県本部、農林総合研究センター、担い手支援課

「#プロジェクトK（けい）」で直売所を盛り上げよう！

ー「あびこん」で頑張る女性農業者の活躍ー



1 活動のねらいと背景

「あびこ農産物直売所あびこん」（以下「あびこん」）は、平成19年に開設し、現在は手賀沼親水広場水の館にて、(株)あびベジが運営している農産物直売所です。

我孫子市は、稲作のほか、行商や直売向けの少量多品目栽培農家が多い地域ですが、近年高齢化が進みつつあります。一方で、農業経験の浅い新規参入者や、父母から経営を引き継いだ女性農業者が多くおり、ベテラン農業者から若手・女性農業者への技術の継承を進める必要がありました。そのような中、「あびこん」では我孫子市農業の持続的発展を目指し、令和4年度からベテラン農家を講師とした勉強会を開催していました。そこで農業事務所もその取組を支援するとともに、女性農業者の経営参画の場を広げることをねらいとし、県アグリウーマンイノベーション事業を活用した普及活動を実施しました。

2 普及活動の経過、結果

アグリウーマンイノベーション事業は、産地や生産組織の女性リーダーの育成に向けた地域農業・産地力アップ女性リーダー講座と、女性農業者の知識・技術の向上により経営参画を促進する農業実践力向上研修会の2本柱で構成されています。農業事務所がこの事業を「あびこん」に紹介したところ、「事業を活用して、女性の活躍の場を広げたい。そのためにも次期リーダー候補者に県域の研修に参加して経験を積んで欲しい。」と活用の申し出があり、「あびこん」に出荷する女性農業者3名のリーダー講座の参加により事業がスタートしました。

(1) 地域農業・産地力アップ女性リーダー講座

「あびこん」から推薦された3名の女性農業者は、令和6年度に8回（集合研修4回、ZOOMでの研修4回）の講座に参加し、経営参画に向けた知識や意欲の向上を図るとともに、「あびこん」の課題の整理・抽出と、その解決に向けたステップアッププランの策定に取り組みました。令和7年度には樹立したステップアッププラン「#プロジェクトK（けい）」（後記）を「あびこん」で実践し、令和8年2月の講座最終回に成果報告を行いました。

(2) 農業実践力向上研修会

表1 農業実践力向上研修会の開催実績

「あびこん」における農業知識や技術の向上に向けた研修会は、若手・女性農業者約20名を対象に実施しました。内容・日程は「あびこん」と協議して進め、研修の講義や講師、視察先手配は農業事務所、会場の確保、研修生への周知や出欠確認、運営は「あびこん」が担い、我孫子市農政課の支援を受けました。研修は、市内ベテラン農家ほ場での勉強会、農業事務所が講師となった基本技術、病害虫防除と農薬の正しい使用法の学習、種苗会社や資材会社を招いての講義、市外農家や種苗会社の研究農場への視察など、幅広くかつ実践に生かせる内容としました（表1）。

年度	開催日	内 容	講 師	場 所
6年度	5/29	・市内先輩農家に学ぶ ・野菜栽培の基礎。農業の安全な使い方	市内農家 農業事務所	現地ほ場 久寺家青年館
	7/16	・秋冬野菜の病害虫防除	農業事務所	水の館
	10/9	・市内先輩農家に学ぶ	市内農家2戸	現地ほ場
	11/26	・種苗会社農場での視察研修 ・株いっぶく堂で女性農業者の活躍を研修	(株)武蔵野種苗園 (株)いっぶく堂	土浦市 香取市
	3/7	・新品目「カイヤン」の栽培について ・夏を乗り切る被覆資材について ・「#プロジェクトK」の進め方	(株)武蔵野種苗園 日本ワイド 加須 女性農業者	水の館
7年度	5/29	・市外直売農家に学ぶ	市外農家	柏市内
	7/29	・秋冬野菜の栽培について	(株)サカタのタネ	湖北公民館
	11/19	・種苗会社農場での視察研修	トキタ種苗(株)	加須市
	3/24	・直売所の現状と課題 ・新品種・新品目紹介 ・「#プロジェクトK」報告	トキタ種苗(株) 女性農業者	水の館

(3) ステップアッププラン「#プロジェクトK(けい)」の実践

リーダー講座に参加した3名の女性農業者が「あびこん」の課題としたのは「立地が良いのでお客さんは多いが、野菜、特に夏野菜が少なく売上が伸ばせない。」ことでした。何かみんなで作

表2 「#プロジェクトK(けい)」活動実績

年度	開催日	内 容	備 考
6年度	9/13	ステップアッププランの検討 （「あびこん」の現状と課題洗い出し）	県リーダー講座
	11/26	夏野菜「カイラン」の情報入手 （武蔵野種苗園研究農場）	視察研修会にて
	12/6 2/7	ステップアッププランの作成 （「#プロジェクトK(けい)」の具体化）	県リーダー講座
	3/7	「#プロジェクトK」開始宣言 「カイラン」栽培講習会	実践力向上研修会にて 講師：武蔵野種苗園
7年度	5月中旬	「カイラン」試作用種子配布	「あびこん」にて
	6/3	「カイラン」現地検討会	我孫子市内農業者ほ場 講師：武蔵野種苗園
	6/27 8/8	「#プロジェクトK」実現に向けた研修	県リーダー講座
	7月～	「あびこん」Instagramで「カイラン菜」宣伝開始	担当：「あびこん」
	9/11	武蔵野種苗園での栽培研修	武蔵野種苗園にて
	9/27	「カイラン菜」初出荷！試食販売実施	「あびこん」秋野菜フェア
	10月上旬	「カイラン菜」のほり、ラベル作成	女性農業者と「あびこん」の共同制作
	11/15	我孫子市農業まつりでの試食販売。あびこんキッチンでの惣菜販売	我孫子市農業まつり
	12月下旬	今年度の販売終了	販売数量約1,000袋
	3/24	「#プロジェクトK(けい)」報告会	実践力向上研修会にて

れる野菜はないかと模索していた時に、視察研修で訪問した武蔵野種苗園から提案のあった野菜が「カイラン」でした。この野菜の栽培・出荷に取り組んでみようと思ったのが「#プロジェクトK」です。

プロジェクトは3名がリーダーとなり企画立案し、栽培者の勧誘や宣伝等の情報発信は「あびこん」が担当、栽培技術指導は農業事務所、種苗会社が行いました。また、我孫子市からもラベルデザインの提供や農業まつりでのPR活動などの協力も得られました。

猛暑の影響で、種子の発芽が悪く何度も播き直したり、お米の保冷庫で発芽させたり、仲間同士で苗を融通したりと、苦労と工夫をしながら、9名の女性農業者が出荷

をすることができ、12月までに約1,000袋が「あびこん」で販売されました。リピーターとなった方もおり、また農業まつりでは、併設するあびこんキッチンで「カイラン菜」※を使った惣菜の試作販売も行い、次年度への期待が高まっています。

※名称は「カイラン」ですが、販売時のネーミングを「カイラン菜」としたため、R7.7以降の表記を「カイラン菜」としました。

3 今後の展開

「あびこん」の2年間の取組で、若手や女性農業者を対象とした勉強会が定着し、栽培技術の向上、経営への参画を図ることができました。また、女性農業者自らが企画立案した新商品「カイラン菜」も、来年度は取組の拡大が期待されます。一連の活動の中で(株)あびベジの代表は常に「お客さんや地域の方々と積極的に交流を深めましょう。」という思いを生産者に伝えており、「カイラン菜」の販売では、対面販売の取組も見られました。

これらの活動が「あびこん」が地域に根差した直売所として発展することにつながり、ここを核として、女性や若手農業者がますます活躍していくことを期待しています。

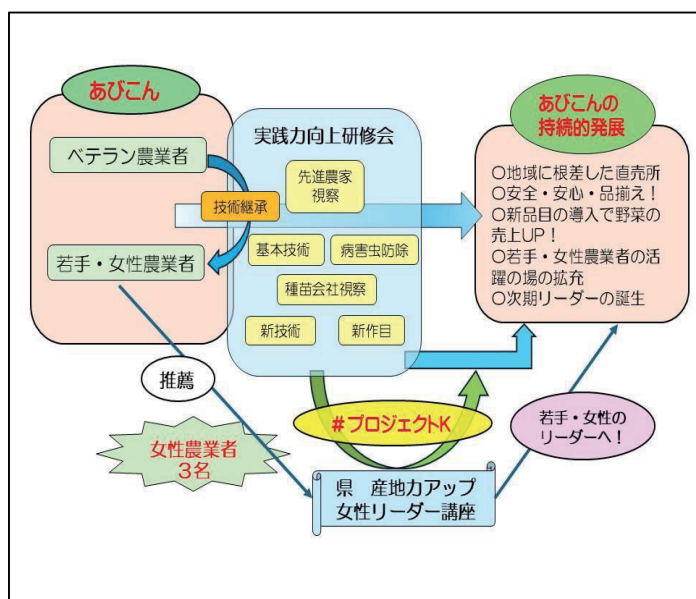


図1 アグリウーマンイノベーション事業を活用した「あびこん」の取組

4 担当グループ 北部グループ

5 協力機関 (株)あびベジ、我孫子市

なし生産における農家の労力負担軽減に向けて

ーボランティアや地域の法人と連携してー

1 活動のねらいと背景

県内で最も都市化が進んでいる東葛飾地域では、その立地を生かして自家直売を主体としたなし経営が盛んに行われています。

近年、中国での火傷病発生による花粉の輸入停止や白紋羽病による苗木の枯死、記録的な猛暑による高温障害など、なし生産においては様々な課題が発生しています。多くの生産者は、こうした対応に追われ、労力不足となり、十分な管理作業ができていない状況です。一方で、なし経営においては、労力需要が季節的であるため、通年での雇用が難しくなっています。また、生産者向けの短期バイトなどの募集媒体はあるものの、高度な技術を要する作業が多いことから、短期就労者に対して作業内容を理解させることが難しいと感じる生産者が多く、なかなか労力の確保にはつながっていません。

そこで、なし生産者が多く県内有数の産地である市川市、鎌ヶ谷市、船橋市を対象に、関係機関と連携した、労力確保の支援に取り組みました。

2 普及活動の経過、結果

(1) 普及活動の経過

ア 市川市と連携した花摘みボランティアの育成

花粉の輸入停止に伴い、多くの生産者がなしの授粉用の花粉を自家採取する必要性が生じました。そこで、令和6年から市川市が、花粉の採取作業を手伝ってもらう花摘みボランティアの派遣に取り組みました。

当農業事務所では、ボランティアに対してなしの花摘み方法の研修を実施するとともに、生産者にはボランティアを受け入れる際のポイントについて情報提供を行いました。

イ 鎌ヶ谷市と連携した新しい作業を担う援農ボランティアの育成

鎌ヶ谷市は援農ボランティア養成講座を実施しており、なしでは毎年 20 名程度の登録者に対して、年 10 回の講座を開催しています。当農業事務所は地域の生産者（指導農業者・農業士）と連携し、実技・座学による栽培技術などの指導を行い、援農ボランティアを育成しました。

また、生産者組合では白紋羽病の対策技術である温水点滴処理機の共同利用に取り組んでいますが、労力不足を理由に実施をためらう組合員がいることから、ボランティアによる点滴処理の実施を推進するため、令和7年度の講座において点滴処理の機械実習をカリキュラムに組み入れるように提案しました。

ウ 船橋市で地域の少年サッカーチームの運営法人と連携した取り組み

船橋市内で少年サッカーチームを運営する法人(以下ネクサム)から担い手支援課を通して、サッカーコーチ業の活動をしていない時間帯（主に午前中）に市内のなし農業を支援したい旨の打診がありました。そこで、ネクサムと当農業事務所、担い手支援課の三者で、今後どういう活動が可能であるか、あるいはしていきたいか、十分に認識の共有を図り、その上で、「地域の農業に貢献するとともに、子どもたちが農業を知る機会を創出すること」を目標として活動

を開始しました。活動を始めるにあたり、なし生産の作業を習得する必要があるため、生産者（指導農業士）を紹介し、そこで研修を実施することとなりました。研修先の生産者と連携しながら、地域の生産者がせん定など、特に負担を感じている作業を研修内容に組み込むとともに、白紋羽病対策の温水点滴処理作業にも挑戦しました。



写真1 ネクスサムによる温水処理の実践

(2) 普及活動の結果

ア 継続した花摘みボランティア活用と雇用への発展

令和6年には15戸の農家が延べ280名のボランティアを活用し、令和7年には9戸の農家が延べ76名のボランティアを活用しました。また、ボランティアを活用した一部の生産者では、授粉作業後の摘果作業なども継続して作業を委託するため、雇用契約に発展するケースもあり、安定的な労力確保にもつながりました。

イ 援農ボランティアから雇用への発展

鎌ケ谷市及び生産者と連携した援農ボランティアの育成により、基礎知識・技術が習得されたことで、毎年2～10名程度の援農ボランティアが生産者とマッチングされ活動しています。その一部では援農ボランティアの経験をもとに、パートなどの雇用につながっています。

また、温水点滴処理機の実習を通じて、援農ボランティアが処理技術を習得することで温水点滴処理が可能になり、今後の外部労力への作業委託の可能性が広がりました。

ウ 民間活力を活用した外部労力の確保の取組

ネクスサムは、研修を通じて、生産者の雇用労力で実施される一般的な簡易作業だけでなく、せん定時の整枝作業（枝の棚付け）や温水点滴処理作業の技術を習得することができました。現在も研修を継続しており、さらに研修先から情報を得て、労力に課題を抱える他の生産者と短期的な雇用契約を結び、労力不足の解消につながっています。

3 今後の展開

今後の雇用の確保については、国で労災保険制度を適用する方針となったことから、生産者にとって雇用導入のハードルがより高くなるため、関係機関と連携しながら産地全体でこの課題解決を図っていく必要があります。

また、雇用労力による作業内容についても、簡易作業しか委託していない現状を見直し、より高度な作業を委託できるよう、農家の労力負担軽減を図っていきます。

4 担当グループ

中部グループ、南部グループ

5 協力機関

市川市農業協同組合、とうかつ中央農業協同組合、市川市、鎌ケ谷市、担い手支援課